

能諧七部集

炭俵

二

第五部	第六冊
能發部	內
驚池藏書	

中村俊定文庫

文庫 18

686

2

8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3



山侯儀序

此集を撰りたる孤屋野坡の牛らハ草ノ一り芭蕉の新
うらひのむむの客と云ふは此の客と云ふは
十好なりと云ふ文字の野風をよけと云ふ事也
ゆりきとのゆきと云ふは此の客と云ふは
大槓より一葉をぬくと巻と云ふは
宋人の毛筆カニと云ふは此の客と云ふは
一糖フキのさやと云ふは此の客と云ふは

全侯のね乃古はよきと云ふは此の客と云ふは
あつらひの身よ入はくもつらうのめさるる也
さしの是し流のすりりもつらうのめさるる也
日乃いつと云ふは此の客と云ふは
や吟詠り篇つらうのめさるる也
わつと云ふは此の客と云ふは
ねと云ふは此の客と云ふは
此の客と云ふは此の客と云ふは

うらハヤまゝなりまゝのくまひよはげしく例のよに
包せむらよめしよと頼むよりおあつらふまゝ
ひと月芭蕉旅の音途よや川をわたりて携へて
再このおとまりし所此本の集の下よなしてよを
袋の裏より出梅の下よんよりくめよと袋の
年とくらしよとくらしよとくらしよとくらしよと
くらしよとくらしよとくらしよとくらしよとくらしよ
くらしよとくらしよとくらしよとくらしよとくらしよ
くらしよとくらしよとくらしよとくらしよとくらしよ

まゝしよとくらしよとくらしよとくらしよとくらしよと
くらしよとくらしよとくらしよとくらしよとくらしよと
くらしよとくらしよとくらしよとくらしよとくらしよと
くらしよとくらしよとくらしよとくらしよとくらしよと
くらしよとくらしよとくらしよとくらしよとくらしよと
くらしよとくらしよとくらしよとくらしよとくらしよと
くらしよとくらしよとくらしよとくらしよとくらしよと
くらしよとくらしよとくらしよとくらしよとくらしよと
くらしよとくらしよとくらしよとくらしよとくらしよと
くらしよとくらしよとくらしよとくらしよとくらしよと

元禄七の夏間とつゝ初三の日は

誹諧炭俵集上巻

芭蕉

むかしうたのつと日乃出る山流る

よましくしり娘ふ乃啼くもは

ふ成美情と去のてまきこふを

上乃るあわしめくもま乃五

雪乃内はくしとせしる乃を

芭蕉をまはれあまのはらひ

野坡

全

芭蕉

全

野坡

内乃の氣りくさるくわくは

娘を笑う人しあはゆぬ

ちあらんくうひおたしつるホツモト細更き

くくくくくくくくくくく

頭けりらみうそりけむ向はな

口しといんあはふ袋あつ

砂骨尻乃お物と押へる

くんにやれをうりまらる名月

野坡

芭蕉

野坡

芭蕉

野坡

芭蕉

野坡

芭蕉

たつ丁よ糸糸下地 参りて見え 流

野坡

家とおもひしり 参合ひとぬふ

芭蕉

所流若流る方と 碎て糸乃流

野坡

門て押 流る 玉生る 念 佛

芭蕉

名 東風より 善きいふれと 鳴き声

全

多し 参るよ 流 眩わ 川 くら 物

野坡

江戸 早も たるおむる 糸 亭 籠 籠 籠

芭蕉

く 参 流 る い 新 ごと う 何 を う す

野坡

方しり 一 善 善 内 の う め 参 る

芭蕉

相 若 ぬ 参 る 月 流 ゆる し

野坡

門 志 ぬ て め ま っ て お 参 る 面 白 け

芭蕉

り ら ぬ 参 る 参 る 参 る 参 る

野坡

光 参 参 参 参 参 参 参 参 参

芭蕉

又 参 参 参 参 参 参 参 参 参

野坡

流 参 乃 流 流 参 送 参 参 参 参

芭蕉

大 参 参 参 参 参 参 参 参 参

野坡

ウ

こゝろ家も東乃方より定むるあり

野坡

美しき喰ひし七ツの 籠り

芭蕉

子よ啼つて一巻しよ室よりなれ

野坡

未だ夢の言乃もてれ 夢中

芭蕉

隙へまゝ知れせず 嫁とてまゝ

野坡

屏風乃 影よりみゆらうとて 盡

芭蕉

三吟

嵐雪

曇好なる遠織々水あけり
あさみや菅り 萑 結 ちる
行るそ若乃小坂若くし
おをばさくく 六 園お 撰 坊
あくと 朔日さる乃 空さる
又移ちる 唯 物も お 止 け 出 る

利牛 野坡 嵐雪 野坡

活線を若く流り乃そけ
あちこち流れを 登る乃 山
あちこち 登る 城を 守り 来 流
とくくくくくくくくくくくく
急谷乃あちこち 豊 稔 聖 後 院
五百のうち中を 二 流 け 流 々 水
相めさる乃あちこち 豊 稔 聖 後 院
人さるさるわぬ 相 思 む し

嵐雪 利牛 野坡 利牛 野坡 利牛 野坡

龍後乃鞍を下せたりと云

野坡

版之中に大なる井を掘りて

嵐雪

漸と雨降り也と云あるの風

利牛

霧散りてハ又鮮なり

野坡

名
東より来る一ふ龍に雲ありて

嵐雪

控掃り子乃小侯を以て

利牛

と云ふしと河内乃岸抽送り

野坡

心より海へ 著るせん多し

嵐雪

壻の来り娘早世と云成りたり

利牛

ことし乃其れも可も云ふ

野坡

遠仙乃孫ふはと云ふ

嵐雪

比ふわいの乃小名多し

利牛

密著物も幼くは月日吹倒る

野坡

多樹乃喧嘩乃結りて月

嵐雪

少くもさしと江戸に人たり

利牛

今月り庄や若くはと云

野坡

夢のうらつてみせらるるたてみ伝

嵐雪

口くわくとゆふのあけ出し

利牛

経念のほきとせにまゝはら

野坡

うしとまのまきぬあし引

嵐雪

信安の母をほくせとまの陰

利牛

まゝとまのまゝとまの月乃 併

野坡

あつ川子
あつ川子

孤屋

色豆乃あはれあはれあはれあはれ
 足乃あはれあはれあはれあはれ 川
 上張を過さぬはと乃あはれあはれ
 了つと乃あはれあはれあはれあはれ
 白後あはれあはれあはれあはれあはれ
 とあはれあはれあはれあはれあはれ

芭蕉
 利牛
 芭蕉
 孤屋

少おわしはあはれあはれあはれあはれ
 色乃あはれあはれあはれあはれ
 姉をよめあはれあはれあはれあはれ
 俗都あはれあはれあはれあはれ
 月あはれあはれあはれあはれあはれ
 家のあはれあはれあはれあはれあはれ
 能汁あはれあはれあはれあはれあはれ
 茶あはれあはれあはれあはれあはれ

利牛
 芭蕉
 孤屋
 芭蕉
 利牛
 芭蕉
 孤屋

こ乃者ハとうやう者名籍ナリ

利牛

うれし一極を今に非し

袋水

電乃法以さうしあも眼 自

孤屋

ふし丸くしも乃おもひ

芭蕉

名 不屋太深と中乃ある

袋水

とつち極をよとくあ

利牛

経中者りううに

芭蕉

美水はきし

孤屋

名者まへにまへて

利牛

空を送りく

袋水

今乃中へ

孤屋

手賣は

芭蕉

息天

袋水

世息

利牛

名月

芭蕉

は

孤屋

沙乃之乃之亂名通也此乃之乃之
 山乃振際名孤乃乃之
 よこ空以乃之風乃乃乃乃
 晒乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
 乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
 余乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

利牛
 岱水
 孤屋
 芭蕉
 利牛
 岱水
 孤屋
 芭蕉
 利牛
 岱水

芭蕉
 孤屋
 岱水
 利牛

各九句

百韻

利牛

ふを裸爰たてて建て又畜ふ
山原ふららのま白に 咲
るあふれぬお急鳩の鳴きして
と力町よわむふゆふ勢
平竹の葉多の種をわらうと
るくう 離れしあましく人あり

野坡 孤屋 利牛 野坡 孤屋

さる乃月千葉ふまけあましく此
掃と法いゝ 標らあましく
ぢがふふ中してわおはらわ海あり
坊とよりあれどやまに平に
松坂やま川へしらあましく 偏り
吹と肝とつとま 園とあましく
十と三并乃衣あましくあましく
ふあましくあましくあましく

利牛 野坡 孤屋 利牛 野坡 孤屋 野坡 利牛 野坡

口乃あさる方とあうむ竹乃と 孤屋

只奈 孤屋 けよ口すく 利牛

巡江 路乃うう名 詞をすゆ 野坡

天らまの 柳よらう、月乃 無 孤屋

生イキたうく 杏に 折也ひい 漢 利牛

操乃 笑る 落る 柳ぬらう 野坡

常ホ美乃 房り 連立 糸のり 孤屋

此 郭 住 之 乃 人 是 之 利牛

海のことと口乃いほい 出 野坡

ほらと びん 程に ぼろ 孤屋

ない 袖を 振て みるも 抱き 利牛

桑 羽乃 糸も ちうす 野坡

吹く ち 糸 糸 土乃 荷の つま 孤屋

出 命 乃 乃 今 日 大 旱テリ 利牛

切 髭乃 喰 倒し ち 柳 ち 野坡

く ち 柳 豆 ち 仕 也 度 庭 孤屋

癩 月とちぎくくもつとく

利牛

若てすけ大方も終乃重く

野坡

つとあふ乃名とや一にひまらわ

孤屋

とたわ乃裏々もまきき并乃本

利牛

おれも月横へ負あら古極

野坡

才いき乃もやんあまるとつと

孤屋

二つ ぶつろりと魚を過り乃淨寺

利牛

戸ていりり并一も風呂乃屋縁

野坡

伐通比概と槍乃すこあふ

孤屋

赤い小えもあ〜〜

利牛

溪とを宿も男乃帯をい

野坡

師を比丘尼乃汎乃定休

孤屋

解橋乃白を垂し賞い〜

利牛

天満も女をよ長れ〜

野坡

唐袖をふくむつ〜

孤屋

お〜記り〜

利牛

鉄片に蒸引ちる 朝乃月 野坡

大あさふとる 表乃 野安らふ 利牛

^{三ウ}かき強て 三肥に 穿けり 野のあ 孤屋

又たのみし して 湯たふさく 野坡

か、けすに 中あふ 己乃り 野あつる 利牛

入あふ人し 味有 豆をと 出れ 孤屋

すちうふに 木綿 袷乃 新田川 野坡

此あふ 己乃み ゆる 野乃 利牛

ほやしとえど ぼろろ 下く ちちれ 孤屋

あまより 餅き じり 熱 汁 野坡

あ乃 四引 餅き 野 櫻 ^{カクキ} 系 利牛

孤怪 年し けり ぼろろ けり 孤屋

あらうらう ちり ぼろろ 野のあ 野坡

入あつく 月乃 云 月 利牛

林 ^キ ちし おふ ちん 表あ けり 野のあ 孤屋

あ ちつめ 何 うら けり 野坡

名
 大乃あぐくに知の砂乃りて
 何年そと抱しきぬ枋の末
 交とまに弓口心乃あぐと純
 丸の十の海成わのらふ
 扱弁ももさうまにたつてし
 足たし一秦殺まう借にまら
 里静と鳴れ引乃がうつて
 やさううものを娘乃襦もと
 利牛 野坡 孤屋

字にうす朝の志乃の粒色若
 うんち果うら八片乃る
 丁亭に仙鹿儀乃口うわ
 折紙の海と出にたまふ
 夕月に勢若うらあまのままら
 色とるるに鱧乃やきもの
 定免を今年も風と勢月也
 七七仕るしもたうぬあそり
 利牛 野坡 孤屋

其^ヤ病^ヤ君^ヤ跡^ヤ去^ヤ月^ヤを^ヤこ^ヤる^ヤ所^ヤあり^ヤぬ
孤屋

其^ヤ月^ヤが^ヤわ^ヤし^ヤと^ヤゆ^ヤる^ヤ所^ヤあり^ヤぬ
野坡

賦^ヤも^ヤあ^ヤぬ^ヤ孤^ヤ屋^ヤの^ヤ迹^ヤ乃^ヤ店^ヤ跡^ヤ也^ヤ
和牛

川^ヤ建^ヤ之^ヤ所^ヤあり^ヤぬ^ヤ後^ヤ
孤屋

彼^ヤ名^ヤ色^ヤ一^ヤ事^ヤ乃^ヤ必^ヤ若^ヤ味^ヤ也^ヤ
野坡

と^ヤ人^ヤた^ヤり^ヤる^ヤ事^ヤ乃^ヤ必^ヤ若^ヤ味^ヤ也^ヤ
孤屋

春之部 殺句

五言

芭蕉 久々も や 伊勢若 初便
 車あやも やまの 戸さつ けうけわ 松
 みちのく 若くも 雲 影ん 雲の 海を
 去や 鏡み 舟波 若く 藤も 海と
 刀片に 但も 丁 丁 丁 今 野の 去

五

いろうしき 春を 春乃 かしき 春 桑
 吟つて や 木 若乃 久 ち しの 柳 柳
 初い ち 門 流 坊 ち の ち 鏡 瓦
 目下 にも 中 若 初 や 年 若 初 室
 初 若 初 若 若 若 若 若 若 若 若
 長 柳 若 若 若 若 若 若 若 若

大坂 酒屋

袋水

法圃

孤屋

利牛

野坡

五言

五

梅

梅一木つゞく草乃出のこゝな

露沾

むめ咲や何所梳木もよまらり

曲家

むめさ香の糸にまよふと山分

支考

家乃うち寝

半賀

むめららや糸乃是まりの日ん

土家

梅はむと湯屋の口ゆきと大のを引り

利牛

赤みうまの口をぬるむめの糸

跡石

みまふくし咲うららむ梅の糸

野坂

み梅まゝ寝ほまもあ戸分

杉風

おろくそもの
せんけをまをみし

とと志るも初うけし白くさ分

吾布

七弟のや寝ほいさうけし切刻

野坡

うちむれしやうな梅むく腫れ

仙松

没方乃又去之

脈有一寸二分

六寸七分

六寸七分

源門乃云

去開也

十五口云

去來

傳

文州

仙苑

利牛

大坂

之石

務乃應初

好之君子

野坡

其有

寫

いふに

さうし

いふに

嵐香

其有

桃儀

うらひはや門をたぬく 豆鼓 負 野坡
雪もふりてまじりし由を入るるゆ 利牛

柳

こめりをもつらしし柳 柳の家 湖春
陸まごし月乃たひひ枝うたふ 古歌
み人あらしむてまじりし柳 野坡

せきまの乃尾を足付る 柳 北 一風
町まじりし 割まじり 利牛
傘に押しわらむる 柳 芭蕉

椿

おとろぬ 笠羅りし 曲 椿 孤屋
枝まじりし 柳 湖春
念入てまじりし 柳 曲

旅り〜きぢみせてゐつ〜
嵐雪
支考
野坡

花

〜乃〜あん〜まわ〜
幕外はらよものまろ小〜
まろはあ〜なかりり〜

つらね

つらね〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜

あやしと云ふあえんの有りたる所
 大うれてもあいのこゝしきうまうま
 柳乃ちぢめあゆむあまのち
 牡丹すく人もあえんをさのこ
 あつたあつとあつち五戒乃探ふ
 志をよももあつたあつちあつ探
 やまのこつちあつち小川乃あつち
 考傳もあつちあつちあつちあつち

新口
 新嵐
 山技
 湯島
 其角
 元雪
 大津
 智月
 大坂
 之石

誰母もあつちあつちあつちあつち
 山極小川あつちあつちあつちあつち
 昆布がしあつちあつちあつちあつち
 おらつちあつちあつちあつちあつち
 柳乃あつちあつちあつちあつち
 あつちあつちあつちあつちあつち
 合乃あつちあつちあつちあつち

猪甫
 萬全
 利牛
 全
 孤屋
 形波
 全

上己

弟は川乃木をたてて

法

登舟りて舟をたてて

舟

舟の舟をたてて

舟

舟の舟をたてて

舟

舟の舟をたてて

舟

舟の舟をたてて

舟

舟の舟をたてて

舟

舟の舟をたてて

舟

舟

舟の舟をたてて

舟

舟の舟をたてて

舟

舟の舟をたてて

舟

舟の舟をたてて

舟

舟

舟

まのりやけりも偶也風乃末

伊賀
猿轡

まのれよまのれよ乃まのれよ

仙華

旅りりし

法度場も場もわ内ハオオオ

野坡

此集りよし
宇大なる此旅心旅

月ひのきくたに
西川まをみまわし

雲ニヤ
こころもあはれ

野坡

秋のあけ
あけ月もあはれ

利牛

夏朝之發句

首夏

垣うを乃裏ほれ見し衣う	嵐雪
衣うへ十のそやくとあはれうわ	野坡
綿をぬく揺ぬへせし衣更	九節
雀うわやれきさうやうん	雪芝
衣乃ぬけとえよほよのあかりう	子母

麻乃暖 屋白し 衣う

利牛

う乃あ

卯うあやうき松る及に

芭蕉

う乃ああのかるあしうの門

去来

詠りし

う乃あに其毛のうらうらあ

許六

卯さるまに相ありしやううう

ま考

し

掉乃初とやう海へかうあ

湖春

菟家祇池子甘しあるゆうあ

素堂

うらふしや作らるる菟に老を鳴

芭蕉

郭云

波中をち之階にねるのほしあ

柳舟

ほしきれ一二る物のお明あ

其角

初燈を月さるおにえんほしあ

嵐雪

挑灯のせに冷たしほしあ

杉風

まうあれてるあ場もゆわほしあ

芭蕉

まうあれてるあ場もゆわほしあ

素龍

吹雪啼り〜風がふりたる
子規歌乃出されぬ捨子外 野坡 利牛

麦

撈ちり麦穂いぬしや化どり 荊口
麦乃穂と在くうとや能海山 千川
麦詠名 伊穂也 逢き 管とよ 許六

畠乃穂行を川はとまはる
刈とみ〜麦乃白もや宿山内 利牛

みちの〜可なり
麦畑也出ぬらても能麦乃中 野坡

おたの〜を
浦乃也むく〜能乃〜事とまはる 益水

湯午

みりしむ物傘にけしる小人	其角
さう物多々くみそ也はきり風の色	大坂 酒堂
五つとふみすみふふふあやめうふ	桃隣
えもたあく口上もたあし	嵐雪
みを乃やあき蒼乃中りう甲た道	仙花
帷子あふさくあふさくあふさく	素秋

夏旅

若松をみいふ所乃あつはる	即ち
枯はあしうきふあつし	新庄
二三十歳 翁もあつはる	菅町
さげ山乃力及えぬあつはる	猿轡
すうの地やふつもまふもふ	芭蕉

いふハなかりのいふり

五月雨

中みしれおとをりへふるるぬるる

主系龍

かきむる色およと川大和川

柳隣

片さしれり少納をくまきり

野坡

五月のやぶ乃をよもも

嵐南

こころの柳路もあさくさぬ

五月のやぶ乃も物もりい

出水

涼

川中代根木にきりおすみ外

芭蕉

月影にうこく夜あやまのま

おうき

涼しけし振よまきり竹乃枝

おゆ七

り槐を志しそまきりすみ系

探芝

涼風をすまわして涼しむ位のみ

智月

すしけをまわしおけ乃まきり

お元早

まじき信御まじり乃はこま
夕まみあふまき石に乃はりくわ
こつ月ま隠しそむくま

去来

野坡

素堂

新

栞や定かおれまのあわこま
吾身中ちくや破幸まきしははま
世乃中也手負富乃く一のま

松風

正秀

里东

子し女りうてまわたる世も徳外
嵐雪

本多信子

やお少も也まあま甲う一ま
ひくつほわら降くまあまのま
まへらや人もすまめせくらま
嗚乃めをほまほせよまのりま
あらし早らぬまこはるうわま外
まみくまのまやま

詩云

智月

山根

山引

女野

仙花

いそれ 蝶もうららつくわつあふ 楚舟

さりしる 頼しうさるしう その 残香

猪乃 二身にり さう 乃有

園を食 伝所乃 か風

けしとむり 鈴を 祐甫

一枝も つけ 仙花

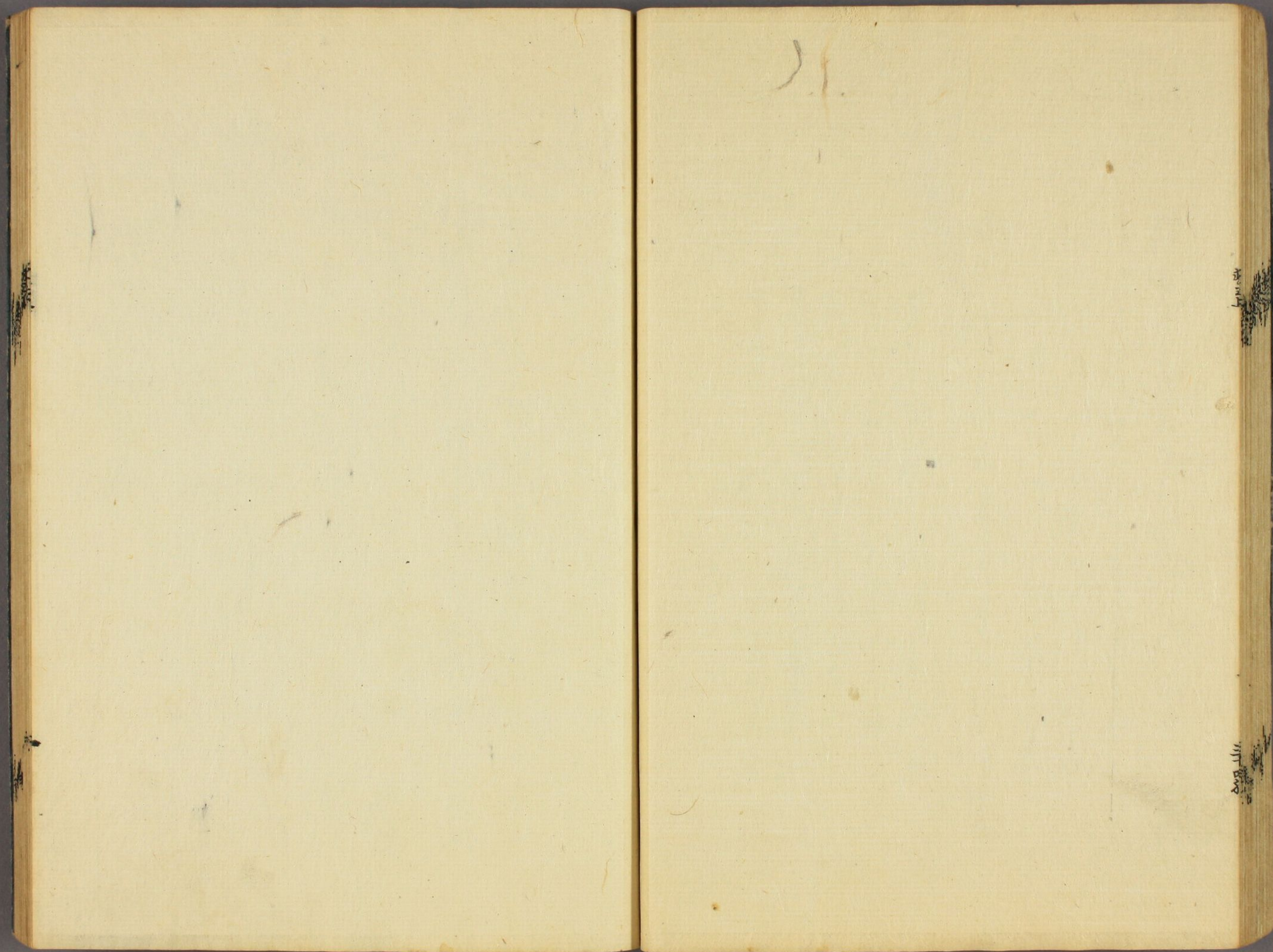
竹を 嵐雪

きんき人 借ら 湯をたしむるを
かき 柳のあひて 流せしむるに
あしむに くれを あしむる
あしむる あしむる
あしむる あしむる

改し 酒より 利牛

あしむる あしむる
あしむる あしむる
あしむる あしむる

行中を 野坡



詠諧炭俵下巻

梅之部

秋のつれいづれの中
月を教へし俵の
こころ

名月

明月也	見つるも	あつと	湖春
名月也	撮 ^ニ 取	よる	去来
家	つと	見	荷今

名月也	誰か	見	まの	好	酒
お	信	や	お	揚	け
り	ら	な	の	ら	け
あ	こ	ら	ま	も	し

むぎの竹社の月と
見はし 望み 不書

明月也 見つるも あつと 湖春

七ノ

舞のふ花はこやな〜

其角

日よかよ〜

孤屋

と〜

嵐香

遊楽集

〜

海老

踊〜

本舞

〜

北波

朝風

明園

朝風や〜

芭蕉

〜

利合

〜

御春

秋虫

手くれとあうハきしきき

大伴 有月

悔り人のとくれやまじく

大伴

端帳りくくくきききき

さか あり

こころきや若くさゆき

孤所

麻

あふ麻の啼しをえうれ

車

人の

原のふむ沢や磯の好恒

好恒

縁の

色に流やうれりき

土

草歌

まほ 那のそぢやあまの、おのあ 柘流

ふすきとくへうくやあしは 那音

片雲のあやゆらとゆの 徳稚

草のあやゆらとゆの 必至

うゑとほし

草のあやゆらとゆの 必至

お中の草、おとみく

草、おのあやゆらとゆの 必至

おのあ

おのあやゆらとゆの 必至

おのあやゆらとゆの 必至

題

左 漢 ちるうぬや秋のこころも 鹿角
 水 田 石の下の葉よるのまのね 石上
 碇のこころよき海ぬのこころ 西堂
 秋のくれりよきこころも 若山
 草のちるや 葉のこころも 思のこころも 行合

又 鳥のけりハ秋のこころも 若山
 こころ秋ハ風こころも 若山
 秋のこころも 葉のこころも 世の上 信
 鹿角の片秋のこころも 鹿角

冬之部

初冬

風やゆきふさふさふさゆのふれ

共角

市中也木の葉も落すゆき

柳流

冬風の初よと初雪と片うけ

芭蕉

椋トビやツバメ流張ハルカよりフキ冬

玉梨

松の葉のふれゆきや小松

神農

刈カたキ冬の初ハのふれハゆきハふれハ

折美

風のふれハゆきハふれハ

物言

ゆきハふれハゆきハふれハ

あま

田タ也キ吟キとキゆきハのハ

八尋

ゆきふれ

ふれハゆきハふれハゆきハ

柳流

ふれハゆきハふれハゆきハ

柳流

時辰

辛酉の辰つら〜ゆりゆり
荊口

思とわわ沖の可ぬのち〜
大平

甚道

つら〜

り〜ぬり〜
新辰

左ゆ〜らぬ〜
静云

新辰の辰

小辰〜
新辰

大根引

新辰〜
甚道

新辰〜
新辰

新辰〜
新辰

はむさ とよの女
よこ

人ありのねまをさるるしはれ せげ

ふの比を先給ねもさらし 示給

さるまやうのねもさるる 利半

さうとさうとさうとさうと 初月

さうとさうとさうとさうと 里菜

右のくらをさうとさうと

さうとさうとさうとさうと

さうとさうとさうとさうと

さうとさうとさうとさうと

題不知

ある—この物へお色紙取

愚言人
呂丸

とて事や物^{ユタ}のしる 向の理

芭蕉

後門のき—そ世みりす十お外

信一云

休大妓のらもぬとてよけ—す

知月

をうそのとらもとれや夜の名

之造

傍のちやあつらう方の五右 大

度中や—く大花のあつたあ 妙

河と化

縁起えんし河と神—条 夢

あへ海へまがや—くはのしる 全

たしなむ

舞くともハこら 棚つゝ大工と
世道

旗押さし〜と〜ハ〜と
事

所つ〜也え 扱とさるる
少

山外のと 申とさるる
事

侍もや 扱とさるる
事

蔵書

このつれと又くちあ〜
松尾

とつれと又くちあ〜
事

とつれと又くちあ〜
事

とつれと又くちあ〜
事

とつれと又くちあ〜
事

とつれと又くちあ〜
事

老若くはあはれいふの事

かゝるにこそ一考ふべし

此の事しるはしむべし あはれ

り あはれ

部 諧 秋 之 部

其 市

秋のらて 尾上の枝より 新氷より
 かくれて 一羽 ぬわく 新 鳥
 多 鳥又 日 偏 揚ら 貝 づら 乙
 月の 隠し 口 藤 の 門 其 市
 社 又 又 又 の 中 御 と 鳥 又 又 又 乙
 づと び び 又 又 又 又 又 又 又 又 乙

下 系 ハ 宇 凡 の 妻 舟 一 づ れ 乙 全
 時 々 の 鳥 又 又 又 又 又 又 又 又 乙 其 市
 是 頃 の 鳥 又 又 又 又 又 又 又 又 乙 其 市
 乙 又 又 又 又 又 又 又 又 乙 其 市
 甲 の 群 又 又 又 又 又 又 又 又 乙 其 市
 乙 又 又 又 又 又 又 又 又 乙 其 市
 乙 又 又 又 又 又 又 又 又 乙 其 市
 乙 又 又 又 又 又 又 又 又 乙 其 市
 乙 又 又 又 又 又 又 又 又 乙 其 市
 乙 又 又 又 又 又 又 又 又 乙 其 市

於羅一桂のさうれはらぬ
 厚の下も 葉さう、あつし
 多るこの物は桂のあゆみなら
 舞一のあゆみのさゆもせてま
 りと心はあさる念のつらき
 みの後のあゆみ——と 10
 なるあゆみのがさあゆみやうれなら
 あづことりん ね信らあゆみ
 孤心 甚事 孤心 甚事

みのさゆ桂のほもさうらうて
 ちとさきさうしう ち ねををまの
 君はねえこつれはあゆのあさる
 神と地とのうきあつし 孤心
 三千一巻のこり、あゆのあゆ
 ちかたはあゆみのさゆ 孤心
 紙燭してさうしあゆみのあゆ
 上さうしと強てさうし 孤心

各ウ

小 桑 淡 玉 屏 言 ませ して せん たり

其カ

ふ ぶ 七 巾 じ り 淡 紫 の じ ぬ

孤 屋

新 庄 孫 毛 じ り ち ぬ じ

淡 へ の じ り じ り じ り じ

今 四 方 ち ぬ 淡 じ り じ ぬ

ね じ り ぬ

其カ

孫 毛

今 三 方 じ

天女氏母り

如部

るるり給ふあつて事らるる

えいこののさうまれあゆ

入目におはるのりとすりあて

海の外まて物めひるる

物まわらうまあつてあつて

つよあつてあつてあつて

如部

如部

如部

如部

如部

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

如部

如部

如部

如部

如部

如部

如部

如部

けりしと念仏をくちりて
 野よりのまじりて
 人の世負ふかえ
 見えやぶしきし
 今午の枝よち柳ハ
 むらみのわらわ
 實色とまじりて
 けりしと念仏をくちりて
 野よりのまじりて
 人の世負ふかえ
 見えやぶしきし
 今午の枝よち柳ハ
 むらみのわらわ
 實色とまじりて

世の業をきりて
 枝のまじりて
 けりしと念仏をくちりて
 野よりのまじりて
 人の世負ふかえ
 見えやぶしきし
 今午の枝よち柳ハ
 むらみのわらわ
 實色とまじりて
 けりしと念仏をくちりて
 野よりのまじりて
 人の世負ふかえ
 見えやぶしきし
 今午の枝よち柳ハ
 むらみのわらわ
 實色とまじりて

今入
 新牛

名

焼物一任合一 冢回氣

初夜

後を覚入して今もよそへ

初年

好むおとこを誇りてはるに安んじ

生後

先師よりしとぬゆゑ入ふ

初夜

ゆてよおきあつてしよみの尾

初年

ちりごも凡のちよめを聞え

世後

沐て日暮

柳川とて布典

芭蕉

振るの唇 けしきんて

陣してハ 中とてゆきも

虫鳴の 枕の小ををりて

川とてゆき 月をみらま

好物の 脛を結まぬ

新木の 安き心の

芭蕉

芭蕉

芭蕉

新午

芭蕉

芭蕉

洞の 老を つこふ

をくくくく 二十

いこくくく 八日

法蓮の ちよと

明くも 花柳を

肩癖を ちよと

上をきの 干草を

くくく ちよと

新午

芭蕉

芭蕉

芭蕉

芭蕉

芭蕉

芭蕉

芭蕉

緋裳のせつはるをさるつれり
 新井
 塀の門あらふや石元
 孫五
 比喩の御冠もよと御月もよ
 意直
 砂よ 膝かみのうつろき 平
 中作
 新島ハタの善もおらつくさのよ
 孫五
 吹とられしる 雲とわよ 中
 新井
 川 野の帯一のふをせよ 中
 中作
 平地のきめうとよ 意直
 意直

干ぬと日向のきくしとせり
 新井
 塀あす 野の巻ふとく 中
 孫五
 美月よ ほせとく 意直
 意直
 又 何はるしよとすめ
 中作
 ごとくと入 海のものうのぬ
 孫五
 子よのこのむ 井のぬさき
 新井
 中うとて 侍中 念の侍りや
 中作
 破をとし みる 性もあうか日
 意直

用^ウやこして秋の野の庵さし
 経乃^ウのまの^ウねとく^ウう^ウ
 ち^ウは^ウと^ウ羊の^ウ掃^ウ場^ウの^ウり^ウ庵^ウ
 月^ウは^ウま^ウら^ウり^ウの^ウし^ウの^ウあ^ウら^ウこ^ウや^ウ
 こ^ウも^ウも^ウま^ウの^ウこ^ウか^ウ中^ウ一^ウか^ウ
 湯^ウ炭^ウの^ウら^ウり^ウを^ウこ^ウら^ウぬ^ウま^ウぬ^ウ
 利^ウ牛^ウ 孤^ウ屋^ウ 中^ウ一^ウか^ウ 中^ウ一^ウか^ウ 中^ウ一^ウか^ウ 中^ウ一^ウか^ウ

芭蕉
 野波
 孤屋
 利牛

各九白

松風

雪の初舞を口みせし雪うしし
 日のあまよへのあまよをらし
 下書を一手信よすりく
 あらくせきし大名の信
 牙ふあらぬもふじく為丹お
 雪をうしれてひろき鳥化
 松風 菅菫 多海 松野 利中

熊谷の地まねしそ舟のま
 笑らしらすし鯉をきき
 二とあてなほおもぬ門の松
 るのさるし 物のをけり干りの
 竹のはきき治ふ多うあのみし
 移よるのまねるのまらし
 ふふちの丁もあぬ舟の女
 さらし舟のまねるまき
 松風 石道 水園 多海 松野 利中

子あくの月をかたちし 藤 中二 信乙
 脊中へめちる 思をいへばる 柳 秋
 山あいらのさぶつ 上よあらうりて 子 雅
 川うすくふ 小 船 じ 重 取
 名 多しやとれし ちり傳りて 群のの 色 杉 凡
 春日へ思れえふ へり みる 赤 水
 おせふし 昔しと 説く ちり 新 屋
 二 信あめて 八 せ 白き 精 色 口 ち 重

解星を揚て 儀へ ちり とみ 柳 秋
 わざく ちとて 業 代 の 礼 信 乙
 ちちあて ちり とり 儀と ちり し 流 團
 とまり へりて 火を ちりて みる 子 雅
 又けさも 仏の 念りて 坊を 明 初 年
 換ちりわ して 賢く ちり ち 松 凡
 大坂の人よ ちりて ちりて みる 日 初 令
 信と ちりて 入 初 母の ちりて 入 那 波

十才めらるる景の節のさけら
 次の小部居てつよむさるる
 物重さうみして居れ、改上合ん
 七つのおうねりやうさうさ
 子あのみあうよ内よ降りあし
 男さのりささるるら
 子堀
 利平
 ちん
 ちん
 ちん
 ちん
 ちん
 ちん

松凡 五
 松尾 二
 芭蕉 一
 子堀 五
 柳野 二
 利平 二
 ちん 二
 ちん 二
 ちん 二
 ちん 二
 ちん 二
 ちん 二

撰者芭蕉門人

志古氏

野坡

小島氏

孤屋

池田氏

利牛

元禄七歲次甲戌

六月廿八日

